相模経済新聞　2023年10月12日号

宇宙生命哲学 ことはじめ 60

北里環境科学センター
名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤 俊洋

羨ましい死に方

私は、1941年12月1日の生まれで、真珠湾攻撃の1週間前であった。姉4人、兄1人、妹1人の7人姉妹兄弟で、戦前、戦中、戦後の混乱期を両親と共に生き抜いた。7人共に健康に恵まれ、全員、後期高齢者の仲間に入った。私は、8年前、長姉の米寿のお祝いの席で、「生命の循環」の話をした。

地球上では、植物が、太陽エネルギーを使って、二酸化炭素と水とミネラルから光合成という反応により、糖などの栄養素を作る。動物には栄養素を作る能力がないので、人間を含む全ての動物は、植物が作った栄養素を食べて生きている。全ての生物は、死ぬと微生物などにより分解されて、水と二酸化炭素とミネラルとなって環境に還ってゆく。全ての生物は、地球環境から生まれて、死ぬと地球環境へ戻ってゆく。言い換えると、全ての生物は、地球環境の中で、過去から現在へ、そして未来へと繋がっている。

人の一生は、素敵な地球人になる終わりのない練習と考えよう。練習だから失敗しても良い。失敗したら、もっと練習をして、段々素敵な地球人になってゆく。死ぬときは、それまでで一番素敵な地球人になって、新しい生命に生まれ変わる。「死」とは、絶望的なものでなく、未来へ繋がる自然の出来事である。話の終わりに、次姉は、「命は巡っていると考えると、死は怖くないね。」と相槌を打った。

「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」ポール・ゴーギャン 1897

次姉は2年前に体調を崩し、昏睡状態になり、7日間、何も食べず、水だけで命を繋いでいた。本人の意思で、延命治療は行われなかった。主治医の臨終間近との判断で、子供、孫、ひ孫たちが集まって、コロナ禍の中、病院のガラス窓越しにお別れをした。それから3日後、次姉は突然目を覚まし、「腹が減ったから何か食わせてくりょ」と言った。流動食を食べて、すっかり元気になると、車椅子で病院中を動き回り、以前にも増して病院の人気者になった。私は、電話で、死後の世界を垣間見るような臨死体験はなかったか聞いてみたが、特別な返答はなかった。子供の頃の楽しい思い出や、若い頃の苦労した経験が、うつらうつら夢の中に蘇ったと言った。次姉は、生きることに対する執着が無くなってきた、とも言った。その後も、昏睡状態に陥ったり蘇ったりを繰り返し、昨年の4月に静かに息を引き取った（享年91歳）。最後は、同じ施設にいた長兄が看とった。コロナ禍にも拘らず、葬儀には沢山の参列者があった。式場には、「千の風」が流れていた。次姉の魂は、素敵な地球人になって、今も、親かった人たちの心の中に生き続けていると思った。